

平成 26 年 9 月

[配布先：全組合員]

市場情報

日 時 平成 26 年 9 月 4 日 (木) 12 時～14 時 15 分
場 所 鉄鋼会館 802 号室
出席数 酒 匂 委員長他 19 名(最終頁参照)
経 過

1. 酒匂委員長挨拶

「適正加工賃の確保」は、個社にとってこれからが正念場

現下のユーザー動向は、3か月前に比べ様変わりのある状態にある。建産機は建機、トラック、クレーン、ダンプ、トレーラーを中心に対応が目一杯でフルの状態である。建築・橋梁も増加傾向にあり、Sファブなどは焦って注文をとりに行っていないようだ。ただ、商社鉄骨に依存しているHファブは先行きに自信が持てない状況。またセグメントは来年度30万トンの発注されることが決定している。来年5月以降3年間は高水準の発注(鋼製 14.5 万トン、PC15 万トン)が続くとみられ、このうち9割方を関東ファブが受注すると言われており、先を考えると焦ってとりに行くこともないのだろう。今後の建設投資の増加が期待される。こうした中、労働力不足の解消策の一環として、外国人労働者の研修制度の改定(採用期間を3年から5年に延長、等)が関係省庁内で審議されている。新法は来年3月頃に施行され、建築業や造船業等に適用され、具体化すると聞いている。円の対ドルレートは、105円を突破し急速に円安が進んでいる。日本船舶への発注・見積りが増加し、一部に選別受注の動きが出ている。一方建築関連は、本日皆さんから報告いただいたように、首都圏の建築案件は、北海道から九州まで全国的に波及してきており、Hファブの仕事が更に忙しくなっている。向こう3～4年間は、とてもじゃないが関東ファブだけでは対応はできない。当組合が課題に掲げる「適正加工賃の確保」の実現は今が好機である。個社個社の取り組みはこれからがまさに正念場である。

2. 各地区の需要動向

北海道

明るさを取り戻す鉄骨市場

「爽やかな北海道は、いったいどこに!」。今年は記録的な真夏日の猛暑のあと、今度は一転して本州地区の梅雨を思わせる長雨に悩まされるといった極端な異常気象の様相を見せた。

暑さは高気圧の影響により 6 月 3 日、道東・音更で 37.8 度の道内最高タイを記録したほか、道北・北見など全道 12 地点で観測史上最高の気温となった。

降雨は、その直後の 6 月上旬～下旬にかけ低気圧が停滞し札幌や室蘭で 17 日間連続の観測史上最長を記録。8 月下旬には道南と道北・稚内、とりわけ利尻・礼文島では 50 年に一度とされる記録的な集中豪雨が発生し土砂災害による大きな被害を受けた。

こうした気候の変動による温暖化面では、今まであまり見られなかった道東・阿寒町でも米の収穫できるようになり、稲作の北限が切り上がってきたようだ。

お盆休暇を過ぎてからは、「一雨ごとに秋が近づく」と言われるように、多少の蒸し暑さは感じられるものの、早くも涼しい風が漂いつつある。

北海道経済は、公共投資が大幅に増加し建設業はじめ各種製造業など幅広い分野で改善が見られている。また、海外からの観光客も確実に増えており着実に復調し好転しているようだ。

しかしながら、民間建築や公共事業が数多く出件されている土木建築分野では、図面設計者や鉄筋工、型枠大工などの技能・技術職不足に加え、工事現場での資機材の逼迫が一気に表面化している。このため新規案件の契約遅延や不調の頻度が強まっており、民間・公共を問わず工事のズレ込み遅れが相当目立ち関係者の間で憂慮されている。

【鉄骨】

業界の基礎データである建築着工統計から推計される平成 26 年 1～7 月鉄骨需要は、累計 95,000 トン（前年度実績 74,100 トン）で対前年度に比べ 28.2%の大幅な増加となった。

先行指数となる北海道機械工業会鉄骨部会道央支部が集計する平成 26 年 1～8 月の共同積算数量は、累計 114,762 トン（前年実績 99,022 トン）で対前年度比 15.9%増加した。

今年度通期の鉄骨需要は、道内・本州物件を含め目標の 20～21 万トンをクリアすることがすでに確実視されており、地域全体の鉄骨マーケットは明るさを取り戻している。

現状、本州首都圏の物件や道内の大型遊戯・複合商業・農業関連施設、病院、物流倉庫など新築の製作加工が潤沢の様子。各ファブrikレーターとも、仕事量は飽和状態とされ高稼働率状態で推移している。

秋以降については、各社とも中小物件の工程調整に苦慮する嬉しい悲鳴をあげており、一部では見積もりの辞退も散見されている。つれて、必然的に受注単価も緩慢ではあるものの徐々に上昇傾向に繋がっているようだ。

先行きの見通しは、そうせいさんく、新幹線車両基地三期工事、札幌駅前～大通り、すすき野周辺での再開発が相次いでいる。山積状況をみるとHグレードは来春まで。M・Rグレードも年内を中心に、一部来年春先まで固まっているようだ。

新規物件に対しては、もう一段の値上げを目指す力強い交渉環境が揃っており、納期と価格面で調整がつかないケースについては見積もり辞退が出始め宙に浮いている物件も見受けられている。

【鋼製橋梁】

今年度の鋼製橋梁の需要量は、ゼロ国・補正予算による前倒し発注を含め 11,000 トン程度が見込まれている。このうち、すでに約 50%発注されたがファブ間に受注数量に偏重がある。このため営業不振に終わった兼業ファブでは鉄骨加工などで凌いでいる。業界では、新規製作はもとより耐震補強や床版、橋台の補強補修についても、切れ目無い適宜な発注が強く待たれている。

【切板】

道内における切板の需要構造は、建築関連や土木・鋼橋梁向けが主体である。この中で、鋼製橋梁については前述の通り、非常に厳しい状況を余儀なくされている。

建築向けは、本州物件や道内の病院、物流倉庫、複合商業・大型農業関連施設の製作加工が豊富だ。これらを背景にしたシャア各社の受注内容は、バラツキは見受けられるものの中小物件が多い傾向にある。また、短納期や小ロット多品種・小物・型・異型対応が大半を占めている。従って、稼働状況はほぼフル稼働が続き、残業も少なくない。

切板価格は昨年後半から強基調で推移していたが現状横ばいが続いている。人件費や運賃、消耗品など諸資材の値上がりから、もう一段の値上げが必要であるが現状さらなる引き上げは容易なことではなく、厳しく難しい経営環境に置かれている。

厚板素材については、需要の回復から高炉メーカーに納期遅延が発生していたが、4～6月期でようやく解消されている。SS400 で一部の板厚に不足感はあるものの、バランスのとれた平均的在庫状態にある。厚板素材価格面では、鉄鉱石や原料炭が 3 期連続値下がりしているが、大きな変動が無いことが強く望まれる。

今後は、人手不足と資機材の高騰で建設費が高騰する採算上の問題から、ホテルや大型商業施設、病院など着工延期や凍結が相次ぎ先行きの動向が懸念されているが、秋口から来春にかけては、札幌市内において JR 札幌駅周辺から大通り～すすき野中心街で数千トクラスの大型開発ビ

ルや遊技場施設が目白押し。このほか、函館新幹線車両基地をはじめ全道各地で複合商業・農業関連施設など中小物件の工事も順調に増加している。

我々としては高稼働が期待されているだけに今年度の目標は、あくまでも「量から質へ」絞った対応が不可欠だ。そして、品質・納期・適正利潤確保を最重要ポイントに掲揚。より一層の付加価値の向上を図り、非価格競争の強化に鋭意取り組み、確実に「将来展望のあるシャーマン業界」を目指す年としたい。

(玉造・西村孝治)

東 北

建築の好材料揃う

東北地方の平成 25 年度第 4 四半期鉄骨需要量は、前年同期比 93%とやや減少した。

福島県が同 153%に対し、北 3 県は 77%~96%、宮城県においては 59%と大きく落ち込んだ。

沿岸地区の復興需要は土木中心に好調だが、建築関連は病院、物流倉庫など間接的な案件に限られた感があり、被災地の都市計画の遅れを反映させている。福島県が伸張している要因は、産業復興企業立地補助金制度によるところが大きく、投資予定額 4132 億円、補助予定金 1961 億円、雇用予定 4955 人と需要喚起の効果が期待できるが、他地区との地域格差が広がっており、アベノミクス効果がもう一つ感じられない印象。

それでも復興住宅の S 造採用の増加、大型耐震改修工事の増加、仙台駅西口開発、また首都圏大型プロジェクトに牽引されての景気回復など好材料は揃っているはずである。

依然、人手不足・運送逼迫は続いており、五輪需要でそれに伴う材料入手難やコスト増が懸念されるが、鉄骨需要の堅調な今、智恵と工夫の出どころである。

(J F E 鋼材東北・大柴宏和)

東 京

建産機、概ね堅調持続

不安視された消費増税後における反動減も一部の部門に限定され、それも予想より程度は軽微に収まっているようである。逆に増税後の影響を全く受けない部門があり、また前回報告時より受注が増加している部門も増えていることから、産機部会シャーマンは操業度で見ると概ね堅調と言える。

【建設機械】 7月の建設機械出荷額は前年比4.9%増、12ヶ月連続のプラスとなった。

内需は復興需要のほか建築工事の増加がけん引。 外需も欧州、中近東向けで好調。

(建機工)

- ・油圧ショベル： 内外ともに前年比で見ると落ち込んではいないが(▲6.8%)、1・2月の販売額・生産台数と比較しても7月はほぼ同レベルとなっていて、期初予想より落ち込みが少なかったことが裏付けされたと言える。 しかしながら大型ショベルの回復基調は心強い点ではあるが、小型ショベルの高い生産レベルは排ガス規制猶予期限の10月末で終了すると予想されており、先行きに不安材料を抱えている事には変わらない。
- ・ミニショベル： 前年比で見ると国内向けは、増税後の4月以降も5月を例外として好調を持続。 排ガス規制猶予期限までの約1年間は足元の高操業が期待できそうである。 また輸出も北米向けを中心に伸びており、当面不安は無いように思われる。
- ・建設用クレーン： ラフレンクレーンも、内外需ともに堅調。 国内向けは公共事業や都市部再開工事の本格化で需要旺盛。 また先行きの明るさや為替環境の変化に起因する中古市場の活況が、重機レンタル業者の買い替え意欲を後押ししている様子。 輸出は大口商談成約情報も聞こえており、依然好調を持続している。
クロークレーン： ラフレンと状況はほぼ同様と言える。 業界全体の4～6月生産台数は前年比+37%の実績となっている。 中国を除くアジア地区向けが堅調であることや、国内建設投資を考慮すると、先行きの需要も底堅いとみられる。

【鉱山機械】 資源国のインドネシア、オーストラリア向けは依然大きく落ち込んだまま。一部東南アジアでの受注が増えていることから、状況に若干変化が見られるものの、主要国における設備投資の抑制は継続しそうなだけに、まだまだ低迷が長期化しそう。

【重電】 国内原発関連には期待が持てない一方で、内外の火力発電に関しては好調な動きがみられる。 重電メーカーによって受注に跛行性がみられ、その結果関係シャアの稼働状況にも濃淡がある。 足元複数案件の並行加工で超繁忙状況が続き、さらにその後も受注見込み案件でほぼ来年まで加工予定が埋まっているシャアもあるようである。 海外向け原発案件については、新興国のインフラ整備促進や東欧でのエネルギー安定確保から原発建設の推進検討等を見ると、先行きには期待が膨らむ。 また現在は端境期で低調であっても、この秋から変圧器の注文が本格的に見込まれているシャアもあり、重電部門の今後は非常に期待できそうである。

昇降機のエレベータ・エスカレータは足元も好調といえるが、下期型だけにこれからさらに増産予定。 来年以降の受注増はほぼ確実でこの部門も堅調が続くそうである。

【鍛圧機械】 工業会の7月受注統計ではプラス29%と好調を維持。 国内では保有期間の長い機械の買い替えを、補助金や投資促進税制が後押ししていることも好調要因の一つと考えられる。

- ・板金系： パンチング・レーザ・プレスブレイク全機種に亘り大幅増(+33%)となっている。 内外とも好調で需要家の高原状態の生産を反映し、シャーの稼働もフル操業が持続している模様。
- ・プレス系： 超大型から小型プレスまで全般に堅調(+34%)。 自動車関連向けはほぼ一巡したようであるが、増税後も5月の受注が一時的に減少したものの、6・7月は大幅に回復している。

【ダンプ・トレー】 国内向けダンプは、メーカーの増産対策後の現在も約1年以上の受注残を抱えており、今後も長期に亘り好調が続く見込み。

海外向けの30トン・40トンダンプの生産が急回復している。 増産背景は特定できないが、関係シャーは、加工体制の縮小後だけに急増対応に苦慮している。

重機積載用トレーラーも高水準の受注を持続している。 防衛省向け契約も今年度一杯まで継続する為、暫くはフル操業が続く見込みである

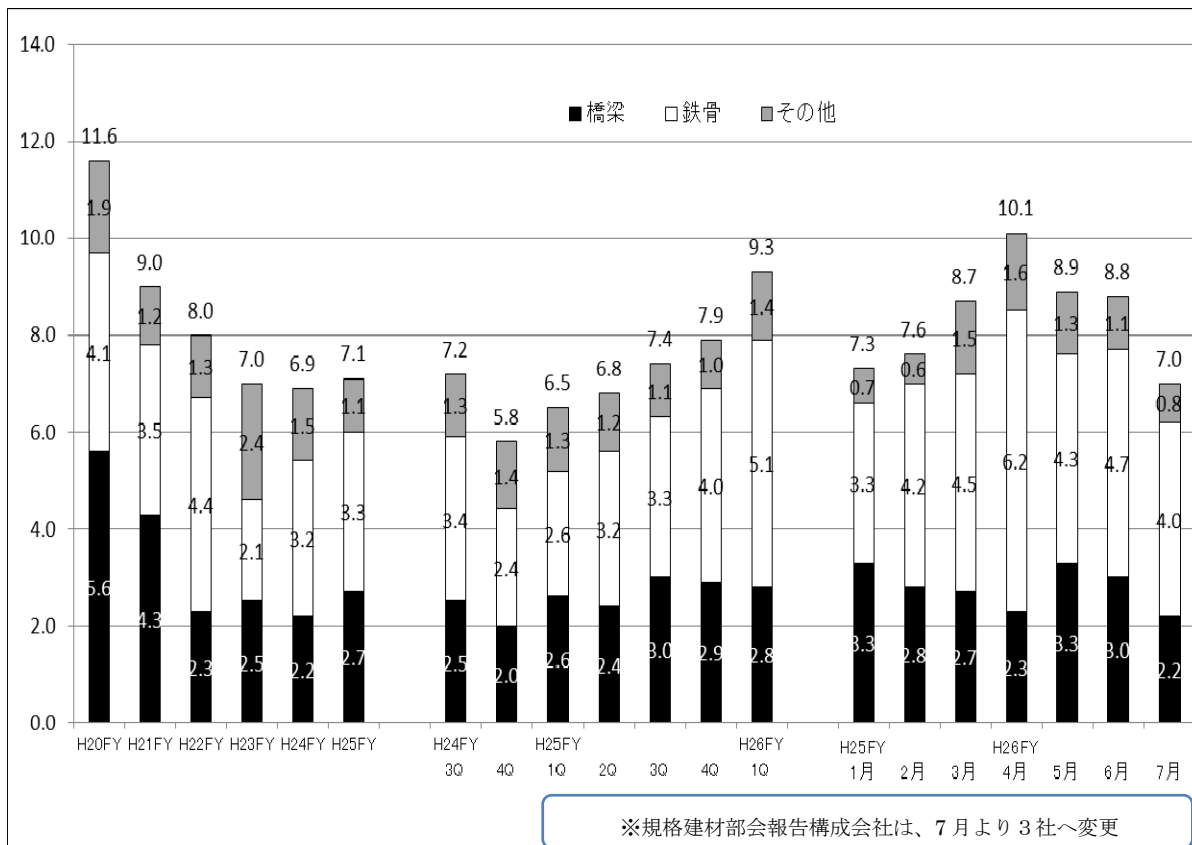
【産機 店売り】 需要家に直結したシャーは徐々に受注が増えているようだが、仲間商売主体のシャーは未だ一進一退の状況が続いているようで、全体としてはまだら模様と言える。 建産機部門が好調である事や建設関連の今後の本格化を考えると、まもなくこの部門にも仕事量が波及してくるはず。 暫くは辛抱して先行きに期待したいものである。

(ニューエイジ・池田啓志)

東京

増勢続く首都圏建築案件

1. 規格建材部会加工量推移 (千ト/月)



2. これまでの実績

全体 主力の当地区建材分野の活動は、引き続き堅調に推移。一部セグメント案件も重なり、足元のシャー稼働率は、100%を超えるレベルにて推移。

橋梁 本年度の全国橋梁落札量は、71千ト(入札量201千ト)。

関東ファブも受注を伸ばし、昨年度後半受注案件とも合わせ、当面の山積みは一定量を確保している状態。

鉄骨 首都圏大型再開発案件の着工が本格化され、当地区Sグレードファブは、各社ともほぼフル稼働継続。

但し、着工の遅れや外注ファブの能力不足による加工遅れは、引き続き継続しており、切断はしたものの切板納入が滞るケースが散見される。

3. 今後の動向

全体 橋梁・鉄骨分野のファブ稼働は、当面堅調に推移する見通し。

年度後半にかけて、S グレードファブの一部で端境期を迎えるところも出る見込みだが、来年度早い時期に高位レベルに回復予定。

セグメント関連需要は、来年度から本格化の見通し。

橋梁 関東地区橋梁ファブの山積みは、今後の落札状況にはよるが、足元レベルは継続される見通し。また、これに加え、西日本ファブが落札した関東案件を当地区にて製作するものもあり、この切板発注が開始される見通しであり、橋梁分野としての切断量は、増加基調。

参考1 <全国橋梁入札量推移(一部推定) 単位:千ト>

	H20FY	H21FY	H22FY	H23FY	H24FY	H25FY (実績)		H26FY (推定)							
						上期	下期	1/四	2/四	上期	3/四	4/四	下期		
橋梁入札量	324	305	283	267	230	114	136	250	62	94	156	54	50	104	260

鉄骨 首都圏大型再開案件の着工が相次ぐことから、基本的需要の趨勢に変化無し。

但し、今年度下期には、大型案件の高層部分の加工(S グレード以外でも製作可) 中心となる物件も多く、一次的にS グレードファブは、端境期になるところもある模様。一方、H グレードファブの加工は、ピークを迎える時期であることから、当地区全体の切板所要は、大きな落ち込みは無い見通し。

参考2 <全国鉄骨需要量推移(一部推定) 単位:万ト>

	H20FY	H21FY	H22FY	H23FY	H24FY	H25FY (実績)		H26FY (推定)							
						上期	下期	1/四	2/四	上期	3/四	4/四	下期		
鉄骨需要量	589	391	418	431	461	256	259	515	123	127	250	128	132	260	510

(富士鉄鋼センター・三浦潔司)

東 京

今一つ盛り上がらない店売り系シャー

店売り主体に営業をしているシャーは、今一つ受注が盛り上がっていないようであるが、一方実需面で堅調である建産機や、首都圏の大型物件もS グレードファブ中心にヤマ高であり、こういった仕事を取り込めているシャーは、消費税増税後の4月、5月も仕事量の落ち込みはなかったようだ。

このように、どのようなユーザーへの供給系列に入っているかということで繁閑の差が出てい

るようである、しかし、今後建築をはじめ各分野の需要は期待が持てるとの見通しが強くなっているため、店売り主体のシャーも、もう少しの辛抱ではないでしょうか。

(武部産業・長澤裕介)

新潟

大型の物件少なく

新潟地区の状況ですが、着工面積から算出する鉄骨量は H25 年度が 8 万 9 千トンであったのに対し、H26 年度予想としては 9 万 5 千トンと前年を上回るペースで推移しております。ただ、4～7 月期の前年度対比でみた場合は、H25 年度が 3 万 6 千トン、H26 年度が 3 万 2 千トンと前年度比 89% となっており、実感としても、昨年度上期ほどの勢いは無いように感じています。

県内の鉄骨の物件としましては、現在建築中である米菓工場や物流倉庫などの民間の設備投資案件に加え、病院建設なども動き出しております。今後としては、化学関連の製造棟や長岡地区での複合施設、新発田市新庁舎などが予定されていることから、件数はそこそこあるのですが、大口の物件は少なく、今一つ盛り上げに欠ける状況で、関東案件などを取り込んでいるファブも多くみられます。

橋梁に関しては、今年度は大型のものを県内業者が落札、また、中小型の案件も今後発注される予定であることから、期待できる状況となっております。

ファブの稼働状況は、H グレードファブは橋梁や関東鉄骨案件も含め、来年夏程度までの受注残を持ちフル稼働となっております。また、M グレードファブも、地場物件を中心に一時受注残が減少してはいましたが、4～5 ヶ月程度に受注残は回復しており、高位で推移しております。

こうした建材系の需要からの切板は予定通り発注されているものの、一般製造業向けの店売り分野が低調に推移したままであり、我々シャー業者の稼働は、一時よりは持ち直してはいますが、大きな回復は見られず、若干の増加、もしくは横ばいとなっております。

また、価格面でも値上げや加工賃の是正が思うように進んでおらず、採算面で苦慮している状況が続いております。

(藤田金属・多村嘉人)

東海

店売りシャー晴れ間のぞく

6 月から 8 月の東海地区の産機系店売りシャーは、前回の報告では落ちていた仕事量が、今回、

回復してきました。

8 月は稼働日数が少ない関係で、売上は減りましたが、一部のシャーを除き概ね好調になってきました。金型やプレート等も前回に比べると増えてきて、土木の物件や重架設リースの物件、今まで余り出ていなかったケーシングやアスファルトを引くホッパー、穴を掘るシールドなども出てくるようになりました。

設備投資関連では、補助金などの影響もあり汎用機の部品が多く出たり、工場用クレーン設備も、消費税増税後も勢いが衰えず好調です。大手ユーザーの設備投資も活発で、6 月は多くの専用機の部品が発注されました。

しかし、7 月に入ると 6 月に多く出ている専用機の部品は、去年辺りは円安の影響であまり仕事が回らなかった中国や韓国に流れてしまいました。今年の春辺りから円安を物ともせず、溶接や切削加工を含め日本の値段を下回る見積もりがでるようになり、今後は中国や韓国の事を頭に入れながら見積もりをしなくてはいけなくなりました。

その為仕事は増えて来ていますが、中々粗利が出ずに悩んでいる店売りシャーも少なくないです。

一方産機系ヒモ付きシャーは前回に引き続き好調を維持しているシャーが多いです。

建機 リフト

前回報告したとおり一部の機種が海外生産に移り、一部のシャーに影響を受けましたが、他の機種を生産しているシャーは、ピーク時そのまま好調な受注を維持しています。流石に 8 月は稼働日数が少ない関係で前月割れはしましたが、6～7 月は前年同月比 6%アップで、9～12 月もそのままの受注が続くと思われます。

クレーン シャベル他

前回の報告と変わらず鉱山用超大型建機以外は好調で、前回同様、杭打ち機の生産の好調さが目立っています。

トラック

前回報告したとおりで、4～7 t ぐらいの貨物トラックは海外移管した車種以外はフル生産が続いており、シャーの作業としてもフルキャパの状態が続いています。

鉄道車両

海外工場の生産が始まり、国内での仕事が少なくなりました。

今後は東南アジア等の物件が決定すれば、国内で仕事が出てくるので、それまでは我慢が続くと思われます。

産機 **鍛圧プレス**

小型 中型とも好調な生産を維持しています。

特に中型の鍛圧プレス機は、生産量もリーマンショック前と同じぐらいまで回復して、尚且つ在庫品は少なく、出ていく製品にユーザー名（自動車、電装、家電メーカーなど）が記入されているので、暫くは多くの受注が期待出来そうです。

その他工作機械

板金物と呼ばれる、ベンダー タレパン ファイバーレーザー等は、前回同様、欧米 欧州 東南アジア向けの輸出が好調です。

一方バンドソーは土木向けのコラム切断をする国内向けの大型機が好調です。

I T向け専用機

スマートフォン向けのチップ取り付け専用機は、年初はほとんど海外生産していましたが、1～8 月の間に、国内生産の量も少しずつ回復して来ましたが、9 月以降は、8 月以前より生産量が増えそうなので、期待が高まります。

造船 **デッキクレーン**

前回、デッキクレーンが、ピーク時の半分程度回復してきたと報告しましたが、造船の生産が戻るにつれ、前回の生産よりも 20% アップしてきました。去年の今頃は、受注に恵まれず、社内人員の配置転換を考えていましたが、急速な回復に安堵しています。

昇降機

7 月までは、前年比マイナスであった昇降機用の厚板は、8 月に入りやっと前年並みの生産量に戻ってきました。

建築の遅れや据付職人の不足等で、中々、年初の生産計画どおりには行きませんが、下期に向けて、生産量が少しずつ回復してきたので、期待が持てるようになりました。

6～8 月の東海地区の厚板シャアの仕事量は、前期に比べ回復してきましたが、粗利の面で、材料価格上昇分の半分ぐらいしか製品に転化できずにいます。

(鈴将鋼材・鈴木康司)

東 海

大型建築案件多く、数量確保に期待

稼働状況 鉄骨工事については、仕事は回復基調。

当地区のファブの稼働も着実に増えている状況ではあるが、建設工事の図面承認遅れや現場の人材・管理能力不足などにより、工期の遅れやズレが多発している。

そのためファブの稼働の増減が激しく、瞬間的に仕事がオーバーフローしたり、逆に仕事が空いてしまったりと、山谷が激しく納期対応に苦慮している。そのため仕事を 100%埋めることをせず、加工賃の確保できる物件などを選別受注している様子であり、平均すると 8 割くらいの稼働である。

建材シャーにはそのまま納期などのしわ寄せが発生し、小ロット、超短納期、納入先変更など細かい仕事の対応に追われている。

シャーの受注量も 7 月以降増えているものの、今ひとつ盛り上がりには欠けている。
見通し 下期以降当地区でも大型物件など多くの計画があり、数量確保は期待できる。

当地区の H グレードでは来年夏建方の物件が決着する時期。

大手ファブではさらに 1 年以上先まで埋まっている状況もある。

M グレードなど中小ファブも通常よりも先までの受注を抱えており、今後忙しくなることは間違いない。但し、受注物件の多くが首都圏物件であったり、地場物件であっても、メーカーや業者の紐がついてくるケースが増えており、今後東海地区全般としての鉄骨需要は増加しているものの、自社の受注に繋がるか否か不透明感が依然強い。

採算状況 変化なし。若しくは悪化傾向が増えている。

その要因として、多品種、小ロット、短納期対応の早出、残業による生産性悪化など。価格も上げ悩んでいる。大型物件では昨年からの価格水準。春から夏にかけて需要低迷したため弱含みで推移。下期以降の価格回復に期待

(中部鋼鉄・村山 敬司)

大 阪

下期に期待

1. 全般

(1) 需要

4～6 月は、需要回復が待たれたが期待外れに終わり、7 月以降に期待していたが、思ったほど量がでていない。下期以降、徐々に回復することを期待。

公共事業入札は滞りなく実施されており、土木・橋梁は一定の仕事量あり。

(2) 一般店売

各分野・需要家にてばらつきがあるものの、4～6月よりは若干出てきている。
しかし、数量的にはあまり増えておらず、至急品や分割発注による細かな内容が増え
手間がかかっている。建機も小型が中心で、建材も中小ロットの発注が多い。
本格的な需要増になっておらず、下期に期待。

2. 需要部門別

(1) 橋梁

4月以降、順調に仕事が出ています。国交省案件ほか入札が実施されており、年度内は
仕事あり。受注する FAB に若干の偏りはあるものの、各 FAB とも受注できている。

(2) 鉄骨

大阪地区はフェスティバル西地区が下期以降、切板加工が本格化。大型案件は少ない。
大阪・西日本でも、東京案件を加工している。

(3) 建機

小型ものを中心に継続して仕事出ている。下期に向け微増しそう。大型ものは少ない。
全体として排ガス規制のあった昨年度の仕事量に比べると今年度は減少見込み。

コマツ 上期より下期増えそう

コベルコ 上期・下期 横バイ

キャタ 上期より減少見込み?

(4) 産機・その他

物件が出ていますが、内容細かいものが多い。加工屋（削り・孔加工など）は繁忙のため
切板短納期が多い。

(日鉄住金神鋼シャーリング・浅野博之)

(玉造・棚橋浩司)

九 州

ファブの高稼働続く

九州地区は建材主体のマーケットであり、4月～6月は低調な荷動きで推移した。7月に入り H
グレート FAB を中心に徐々にリストは出始めているが、8月に入り前半のリストの出具合は低調で、まだ本
格的な荷動きに至っていない。

【建築】

大手 FAB の稼働状況は 14 年度上期中は高稼働が続く見込み。下期についても秋口以降関東

案件が徐々に動き、高稼働が継続されると予測する。しかし人件費、輸送費、電力費用等のコストアップ要因が完全にヘッジできておらず、採算については厳しい状況である。

九州地区の大手FABでは、関東案件の比率が今後かなり増加すると推測される。

【土木】

2014 年度 4 月～7 九州地区、公共工事請負金額は前年度同期比プラス 1.8%となっている。7 月は前年同期比+4.8%で伸び率が若干であるが上向き傾向の状況。

例年通り、新年度に入り第一四半期は新規物件が低調。又作業員不足の問題により、入札不調、入札延期も散見される。至近の仕事量は継続工事（九州新幹線）及び西九州道、東九州道、中央九州道等の道路関係が動いているが、切板需要には結びつかない。

【橋梁】

九州 FAB の稼働状況は、昨年受注分の加工が上期に入っており、小口案件が多いながら昨年よりは、高い山積となっている。水門メーカーも東北地区向け受注により、今後も高稼働となる見込み。

【産業・建設機械】

円安効果もあり、受注増加傾向だが、九州地区での製造は限定的。依然中・韓の競合企業との価格、納期競争が激しく、失注案件も散見される。輸出比率が高いことから材料調達も海外調達比率が増加傾向にある。

建機メーカーでは、九州地区建機メーカーは 13 年度の好調な生産を継続し、14 年度も前年を上回る計画となっており、予定通りの生産状況となっている。

【造船】

総じて各造船所とも去年より受注を増やしており、仕事量は 2 年～3 年は確保している状況。良い船価の船を入れてピッチを上げたいものの、人、外注ブロック加工先の能力不足でなかなかピッチアップ出来ない状況。

8 月 19 日 シャーリング工業組合 九州支部の報告 （出席：15 社）

工場稼働

70%台 6 社

80%台 2 社

90%以上 7 社

15 社

(豊鋼材工業・牧野智治)

九 州

1 6 年度完工分から船価上昇も建造ネック多し

4～6月期は前年比では落ち込むものの、年央には回復軌道に戻る見込みである。しかしながら、生産能力の低下・人手不足の深刻化等成長ベースは緩やかにとどまる見込みである。

また、建機中心のマーケットであるが地場案件の落ち込みによりマインドも含め足下は弱基調である。

【建機】

地場大手Y建機(小型建機中心)

2013 年度実績	14,370 台(14,000 台)
2014 年度見直し計画	17,000 台
2014 年再見直し	上期は好調に推移も下期は下方修正の見込み。 (修正規模は不明も若干であると予想される)

高水準の公共事業や輸出の緩やかな増加で好調も、下期は消費税引き上げ前需要の反動が幾分か反映される模様。

【造船】

2013 年以降、日本及び世界の新造船受注は、投資マネーの流入なども背景に好調に推移してきた。

九州地区の中堅造船所も同様で 2016 年～17 年度の船台は埋まっている。しかし、2014 年～15 年度に完工される船価は概ね低価で、当面の業績は厳しいと予想される。2016 年度完工される船価は改善傾向にあるが、人手不足、資機材の需給タイト化が建造ピッチアップに水を差している。

また、2014 年 7 月 1 日以降の契約船に適用される新騒音規制は 2 万 t クラスの船舶が該当するため、九州地区の造船所への影響は高い。

規制対応によるコストアップを船主へ転嫁が出来るか不透明であり、業績改善へ向けて楽観視は出来ない。

【建築】

地場大型案件が完工し、首都圏案件流入がより鮮明となる。

大手建機系シヤは年度内の山積みもある程度埋まった模様。中小案件は減少しMグレード以下の移動に陰りも見える。

特に中心地区である福岡県においては、5 月前年度比 44.9%ダウンと極端に落ち込み、沖縄

県を除くと苦戦が否めない。

他地区大型プロジェクトに参入できる FAB、シヤも限定されており、受注環境は価格も含め改善傾向に腰折れ感がある。

(トキワスチール・岡哲朗)

3. 石原理事長挨拶

「歩留り」問題の解決が最優先

「全体的には、2008 年のリーマンショックによる急減以降徐々に持ち直し、東京五輪の 2020 年に向け着実なる需要回復が期待される状況にある。しかしシヤ業者の利益は一向に改善の兆しが見えてこない。各工程でのネック発生で作業の段取りが組めず、シヤの機会損失は数百時間に上っているという現実がある。組合として、過去 5 年以上にわたり「商慣習の改善」のための土壌づくりに鋭意取り組んできた。これからは、それを礎にしながら、一つ一つの「基準」を個々社がキッチリ固めて、ユーザーと交渉を進めていく必要がある。例えば「歩留り」85%と一般的に言われているが、これが70%になったとき具体的にどう対処するかである。この時自社の「基準」が明確になっていないと身動き取れないし、お客さんへの丁寧な説明もできない。この辺でずっと滞っていたらいつまで経ても問題は解消されないと思う。需要があるうちがチャンスである。今年度下期から来年度にかけて、各社知恵を出し合い、成果を一つでも多く積み上げてまいりたい。汗を流してまで損はしたくない。やはり「歩留り」問題を解決しなければ話にならないし、ユーザーに必ずヘッジしなければならない問題だ。「歩留り」は建材以外の分野はすべて解決している問題である。今後とも組合員皆様のご協力を切にお願いしたい。」

(参考) ≡ 出席者 ≡ (順不同敬称略)

- 委員長・ 酒匂 (京浜産業)
- ゲスト・ 石原 (理事長/J F E 鋼材)
- ゲスト・ 大住 (理事総務委員長/富士鉄鋼センター)
- 北海道・ 西村 (玉造株)
- 東 北・ 大柴 (J F E 鋼材)
- 東 京・ 池田 (ニューエイジ)、
三浦 (富士鉄鋼センター)

「第 162 回市場情報/(H26.9.4)」

東 京 長澤（武部産業）
 原 （原シャリング／）
 河合（J F E 鋼材／）
 小河原（神鋼鋼板加工／）
新 潟 多村（藤田金属）
東 海・ 鈴木（鈴将鋼材）
 村山（中部鋼板）
大 阪・ 浅野（日鉄住金神鋼シャーリング）
 棚橋（株玉造）
九 州・ 牧野（豊鋼材工業）
事務局・ 柘野、染宮

4. 次回の開催日時・場所

第 1 6 3 回市場委員会

平成 2 6 年 1 2 月 5 日（金） 1 2 時 大阪鉄鋼会館

以 上